



ベトナムで無償で眼科治療を行っている服部匡志医師（48）。ベトナム人医師から「神の手」と讃えられる技術で、医療費が支払えない貧しい人たちの目に光を取り戻してきた。治療した患者の数は1万人を超える。活動開始からこれまでの10年間で、さまざまなエピソードを交えながら語ってもらった。（紫雲泰信）

一服部先生の活動は、これまで数多くのメディアで取り上げられてきました。読者にはもう御馴染みだと思うのでなるべく過去何度も聞かれてきた質問は避けたいと思いますが、これだけは聞いておきたいと思います。なぜ、ベトナムだったのでしょうか？

「2001年のことですが、京都で開かれた眼科学会の懇親会で、たまたま隣り合わせたのがベトナム人の眼科医でした。彼からベトナムでは今もたくさんの人たちが手術を受けられずに失明している。先生の技術なら助けることができる、と訴えられたのが始まりです」

—しかし発展途上国の多くで実情は同じですね。

「ベトナムについてはあまり情報を持っていなかったのですが、自分の中にその言葉に反応する何かがあったんでしょうね。それに直接、そんな風に自分の技術を求められたのは初めての経験でした。とりあえず現場に行ってみたいと思い、勤務先に2週間の休暇を申請したのですが、ダメだと。半年ほど迷いましたが、結局、勤務先を辞めてベトナムに向かったのが2002年4月です」

—以来、1年の半分は日本でフリーの眼科医として日本各地で治療にあたり、その稼ぎを持ってベトナムを訪れ、貧しい人たちに無償で治療を行う。そんな生活がもう10年以上も続いています。ベトナムでの活動を通して、先生が学んだことは何かありますか。

「それはたくさんあります。まず、我慢すること。あきらめないこと。どんなことでも必ず解決方法はあるはずと何でもポジティブに考えること」—その言葉から、これまでの活動の苦勞がうかがわれます。これまでで一番大変だったことは。

「ずっと腰痛を抱えていましたが、昨秋に、腰椎椎間板ヘルニアであることがわかりました。坐骨神経痛がひどく、座るのも大変という感じでした。11月にヴィンフック省で治療を行う約束があったのだけど、あまりの痛さにとても無理だと思いました。しかも場所は省の中心からさらにデコボコ道を3、4時間走らなければならないカンボジア国境近くの場所。しかし現地では患者たちが日本のお医者さんが来るということでみんな期待して待っている。『来るだけでいい、あとは寝てくればいい』と言われ、ならば、と行くことにしたのです。その時は私達のチームは6人でしたが、一緒に行くチケットがとれず、先に僕ともう1人の先生が行き、あとから通訳を含め4人が別の飛行機で追いかけてくることになっていました。ところが現地に着いても、後続組がやってこない。しかし時間になれば患者はやってくるので、治療をしなければ



ならない。何が寝てくれればいいだ。痛くてたまらないけどやるしかない。夕方まで頑張りましたが、もうこれ以上できないと思い片付けている時に4人が到着しました。飛行機が5時間遅れたらしい。ハノイに帰る飛行機も機材トラブルで5時間遅れて、散々な目に会いました。その後、症状は悪化し、12月のプロジェクトを何とか終え、1カ月間は完全休養。痛くて食事もおべられず、10数キロ痩せましたよ」

—それほど苦しかったのに、予定をキャンセルしようとは思わなかったのですか？

「みなさん、首を長くして待っていると言われました。僕は約束したら、必ず守るように一生懸命頑張ります」

—ベトナムで先生が得た財産とは何でしょう。

「僕の手伝いをしてくれている Hung 先生、彼の存在が重要でした。たまたまベトナムでの受け入れ先となったベトナム国立眼科病院で僕の世話係になったことから付き合いが始まったのだけど、最初は少ししか手術ができなかったけれど、徐々に上達し、今では僕以上に良くなってきています。今の技術を持ってすれば、すごい金儲けができるはずなんだけど、今も昔と変わらず、僕と一緒にどんな場所へもボランティアとして付いてきてくれる。彼がいなくなってしまうと、自分はベトナムでの活動が何もできなくなるかもしれない、とまで感じています。彼には心から感謝しているし、ベトナムの大きな希望だと思っています」

—ベトナム人のいいところというのは、どんなところでしょう。

「ケンカしてもそれで終わり、後腐れなくさっぱりしているところ。5年ほど前、こんなことがありました。手術室で、もうむちゃくちゃ頭に来て、大